

日本語母語話者の視点における明示的指導の効果 —事態把握の概念を中心に—

鄭 在喜

科目名：日本語文法における視点 3-4

レベル：初級 1・2 / 中級 **3・4**・5 / 上級 6・7・8

履修者数：31名

1. 授業概要

日本語は、ある状況・場面を主観的に捉え表現する傾向が、他の言語に比べて強い言語であると言われている（池上（2006, 2011）、近藤（2014）など）。本科目は、このような日本語母語話者（以下、日本語話者）が好む主観的な捉え方（以下、主観的把握）を学習者に明示的に指導し、ある状況・場面において「どうして日本語話者はこの文法を使って表現するのか」、「どうして日本語話者はこのような表現を好むのか」について理解を深めることを目標としている。

本科目は、認知言語学の事態把握（construal）という概念を基に、日本語話者と学習者の捉え方が異なるとされる「授受表現・ヴォイス（受身／使役／使役受身）・ナル表現・日本語話者の「見え」：主語「私」の使用」の4つの項目を取り扱っている。そして、本科目のシラバスには「この授業は新しい文法を学ぶものではなく、初級レベルで学習した文法項目を見直すものである。ある状況・場面においてどうして日本語はこの文法を使うのか、どうして日本語ではこのように表現するのかについて考える。」と明記し、必ず初級レベルを履修してから本科目を履修することを勧めている。

2. 授業の流れ

本授業では、初回のオリエンテーションとして、ある漫画を見てそのストーリーを具体的にまとめる作文活動を行う。その後、グループで話し合いながら、同じ漫画を見て作文をしているが、漫画のストーリーのまとめ方はそれぞれ異なる、例えば注目している人物や、場面の出来事に対する解釈、即ち捉え方がまちまちであることを理解してもらい、本科目において最も重要なポイントとしている「気付き」について明示的に説明する。

そして、前述した4つの文型項目について簡単な復習を行い、教員が提示する状況について日本語でどう表現したらいいのか、グループで話し合って発表する。教員は学習者と日本語話者の捉え方の差について明示的に説明し、日本語と母語との捉え方の違いについて気付きを促す。その後、それぞれの文型の産出を想定して作成した漫画を見て作文を提出する。次の授業では、その作文についてグループで発表・話し合いを行い、学習者同士で互いの異なる事態把握に気付き、それをコメント用紙にまとめて授業中に提出する。そ

の後、作文について教員からの明示的なフィードバックをもらい、自然な日本語について更に考えてもらう。

3. 最終レポート

授業では前述した作文を用いたグループ話し合いを、それぞれの文型項目に合わせて4回行い、最終レポートを提出することになっている。

レポートは、「母語と日本語の差について」というテーマの下、授業で扱った4つの文型項目のうち一つを選び、母語との比較について述べる。この作業を通して学習者は授業で学んだ日本語の性質について更に理解を深め、かつ母語との比較を通して、ある状況や場面の出来事を日本語で発言する際の違いについてより明確に気付くことができる。

実際に学習者のレポートを見ると、中級レベルなりに日本語と母語との文法的な差に注目し、かつ授業で扱った文型項目に対する理解も深まっていることが窺われた。

4. 今後の課題

本科目は、筆者自身が留学生であった時期に感じていたことがベースになり、着眼したものである。最近では学習者のニーズの多様化、そして様々なコンテンツから日本語学習が簡単にできるようになったが、それでもなお、高等教育機関で学ぶ日本語教育は差別化が必要だと思っている。日本語話者のように自然な日本語で話せるようになるためには、本稿で述べているように、日本語話者が好む事態把握の明示的指導は欠かせないと考える。

本科目では、日本語の文型の中でも最も日本語話者の事態把握が際立つ文型のみを取り扱っているが、今後は更に文型項目を増やし、学習者の自然な日本語に貢献できる授業として努めていきたい。

参考文献

- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』NHK ブックス
池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房, 49-67.
近藤安月子・姫野供子・足立さゆり (2014) 「韓国語母語日本語学習者の事態把握－日韓対象言語調査の結果から－」『日本認知言語学会論文集』第14巻, 373-382.

(ちょん じえひ, 早稲田大学日本語教育研究センター)